

## 第2章 史跡を取り巻く状況

### (1) 概要

函館市は、平成16(2004)年12月の市町村合併後、北海道南西部の渡島半島南東に位置する亀田半島の大部分が市域となっており、南は津軽海峡、北から東は太平洋に面している。市域の中央は亀田山地が占め、西側は函館平野が広がる。市の中心となる市街地は、津軽海峡に突出した函館山(標高334m)を軸とした扇形に広がり、市内には亀田川、松倉川、汐泊川などの二級河川をはじめ大小の河川が流れている。

史跡大船遺跡が所在する南茅部地域は、亀田半島北岸の太平洋に面しており、北海道の中では年間を通じ、気候は比較的温暖といえる。地理的には噴火湾の入り口にあたるため、暖流と寒流の接する前浜はマコンブやタラ、マグロなど水産資源の豊富な地域である。

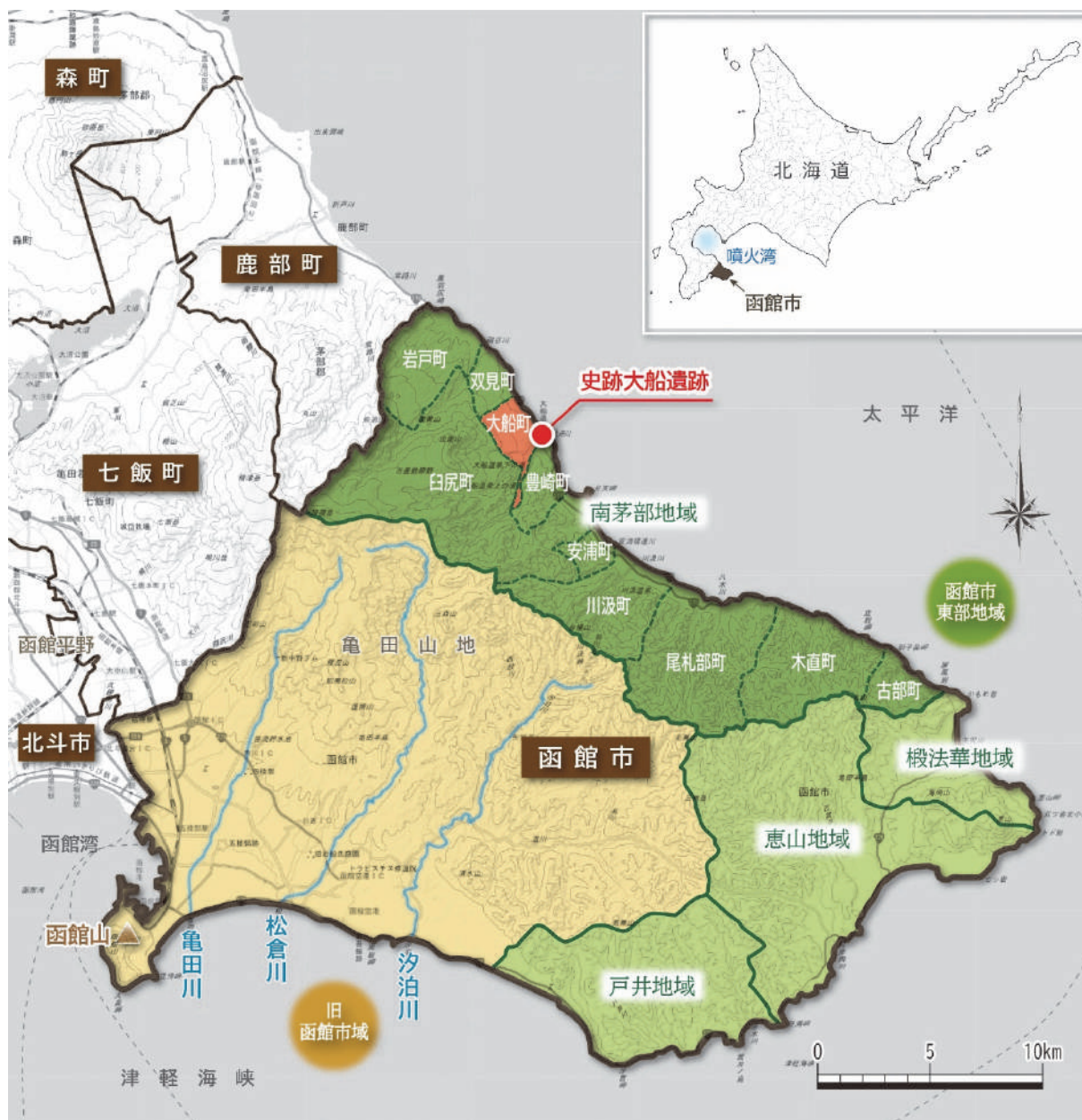


図2-1 位置図(市域・地域 S=1/30万)

道域…白地図(白地図専門店)をもとに作成  
市域…地理院地図(国土地理院)をもとに作成

本史跡は、南茅部地域の北寄りを流れる大舟川左岸河口付近の標高約40～50mの海岸段丘上に位置し、南側の背後には亀田山塊の一部でかつてはクリ林だったと伝えられる泣面山（栗の木山）が迫る。大舟川は現在でもサケ・マス類が遡上する魚影の濃い河川である。



写真2-1 大舟川



図2-2 位置図 (史跡周辺 S=1/8万)

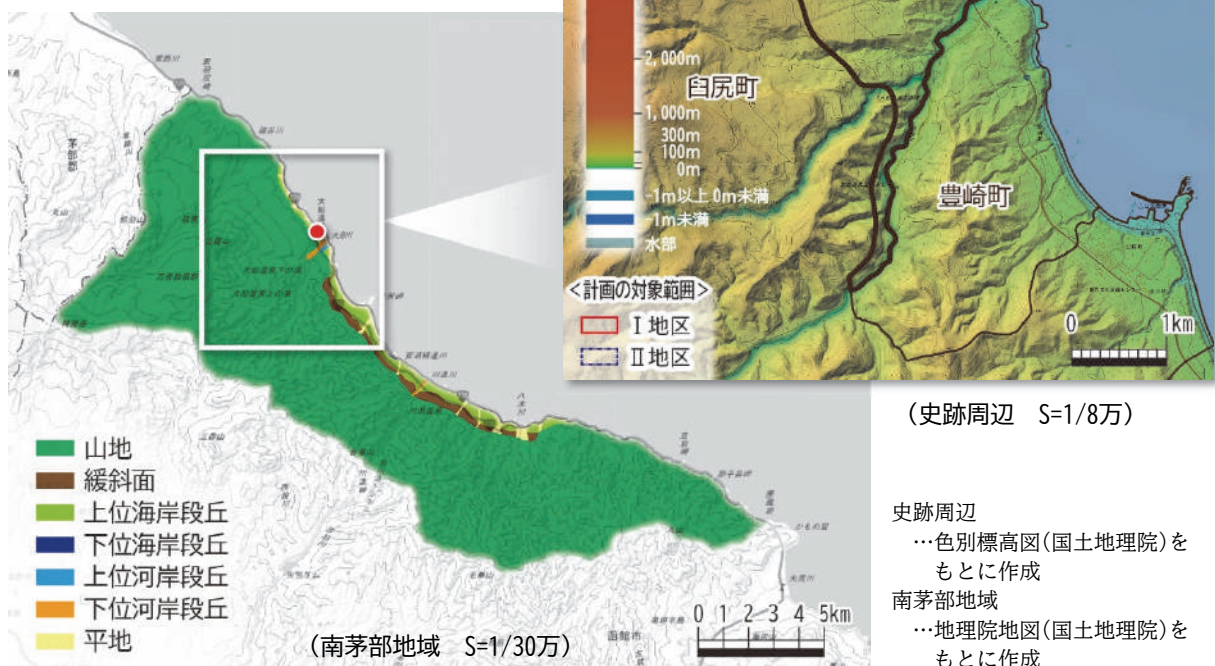
地理院地図(国土地理院)をもとに作成

## (2) 自然的環境

### ア 地形

本史跡の所在する南茅部地域の地形は、山地地形、山麓緩斜面、海岸段丘、河岸段丘、平地、海底地形に大別できる。

そのうち本史跡は、標高約40～50mの海岸段丘上に位置している。



(史跡周辺 S=1/8万)

史跡周辺

…色別標高図(国土地理院)をもとに作成

南茅部地域

…地理院地図(国土地理院)をもとに作成

図2-3 史跡周辺の地形図

## イ 地質

本史跡の所在する大船地区の段丘上は、泣面山からの崖錐堆積物あるいは扇状地堆積物に大部分が覆われ、形成されている。史跡直下、大舟川左岸の崖面および同右岸の山側には石器の素材となる硬質頁岩や頁岩が広範囲に分布している。大舟川に注ぐ上流、ガロウ川の両岸にも同様に硬質頁岩や頁岩が広範囲に分布している。こうした石材に恵まれた環境が、大規模な縄文集落が成立する要因の一つになったと考えられる。

## ウ 土壌

本史跡の所在する大船地区は、山域に褐色森林土が広がり、大船遺跡の南東側は海岸から約1 kmに1～2 kmの幅で黒ボク土が帯状に分布する。史跡周辺から山裾にかけて黒ボク土地帯が帯状にみられることから、ススキやササなどの植生が広がっていたと推測されるが、これは里山など、ヒトの活動によって形成された可能性もある。



写真2-2 黒ボク土の調査（平成17(2005)年度）



図2-4 史跡周辺の地質図 (S=1/8万)

地質図(産総研究 地質調査総合センター)をもとに作成



図2-5 史跡周辺の土壌図 (S=1/8万)

地理院地図(国土地理院),  
土壌図(日本土壌インベントリ)をもとに作成

## エ 植生

南茅部地域の全般的植生と植物相は、本州の延長線上にあって、海岸に沿って街村状に発達している市街地と、これに伴う耕地、植林地を除いた全域のほとんどが夏緑広葉樹を主体とする自然林に覆われ、植生は豊かである。

史跡の植生は、現在は、人の手による開発が行われ、畑地と落葉針葉樹植林地（カラマツ）となっているが、縄文時代は、史跡の周辺に見られる自然植生のエゾイタヤ・シナノキ群集があったと思われる。エゾイタヤ・シナノキ群集はエゾイタヤ、シナノキ、ミズナラ、ハリギリ、ウダイカンバ、カシワが主な高木となる。

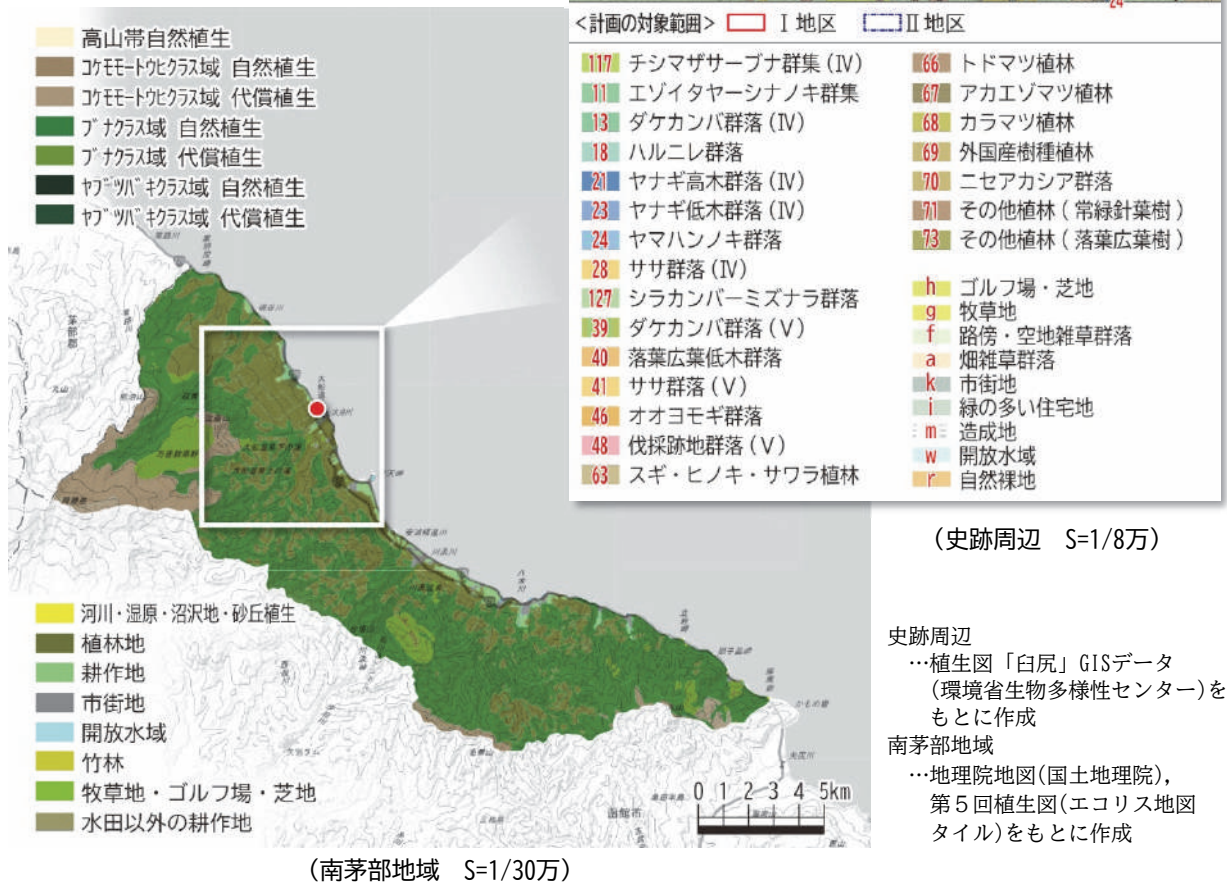


図2-6 史跡周辺の植生図

## オ 気象

南茅部地域の気象に最も大きな影響を及ぼすのは海流と背後に迫る山塊である。この地域の気象は、対馬海流（暖流）や千島海流（寒流）の影響を受ける海洋性気候であり、夏季には海霧が発生しやすい。昭和51(1976)年以降のアメダス統計によれば、平均気温は、8月から9月にかけての盛夏でも26℃前後で、30℃を超える日はごくまれである。一方、1月から2月にかけては0.5℃

から－9℃前後で、厳冬期でも－10℃を下回することは珍しく、年間の気温較差は小さい。降水量は、0～1.4mm以下が多く、降水量の少ない本市の中でも特に少ない地域と言える。風は静穏な日も多いが、南西または南南西の風が年間を通じて多く吹き、冬は北西の風が多い。初雪は11月初旬で、降雪量は比較的少ないが、3月下旬には大雪となることがある。

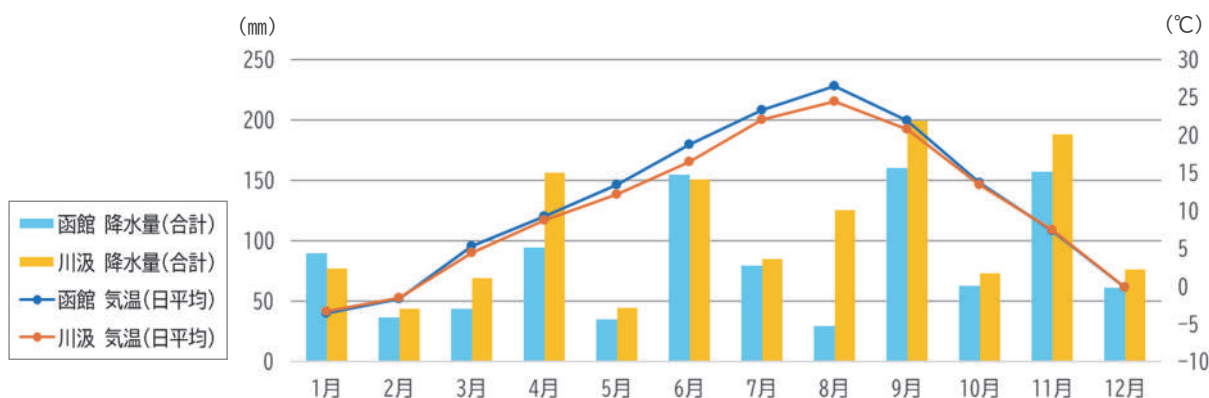


図2-7 函館・川汲の月別平均気温・降水量（令和5（2023）年）

気象庁の「函館」「川汲」の観測データをもとに作成

### （3）社会的環境

#### ア 人口

現在の函館市は、平成16(2004)年12月1日に函館市、戸井町、恵山町、楳法華村、南茅部町の1市3町1村が合併して20年が経過している。

本市の人口は238,215人（男性108,457人、女性129,758人）で世帯数138,838世帯と、北海道内では札幌市、旭川市に次いで第3位の人口を有する。このうち、南茅部地域全体では4,207人、2,276世帯で、本史跡の所在する大船町は342人、175世帯となっている（令和6（2024）年5月31日現在）。

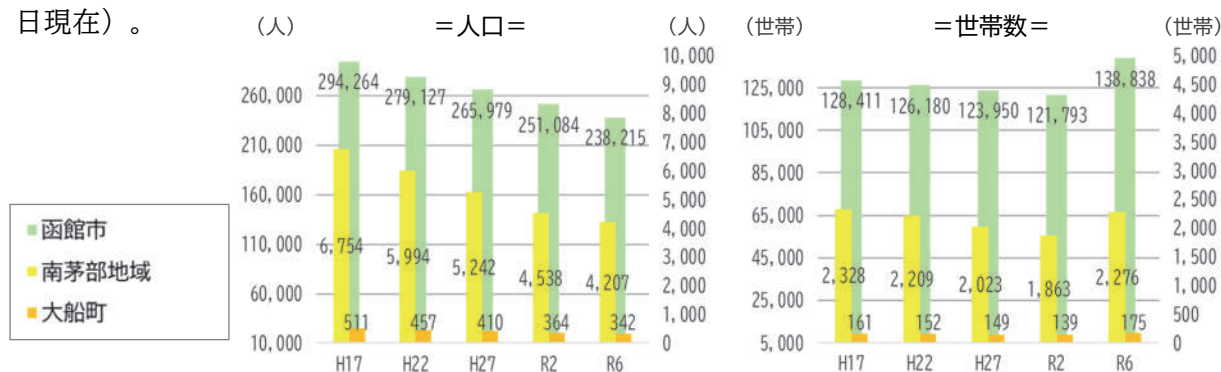


図2-8 函館市・南茅部地域・大船町の人口と世帯数

国勢調査・住民基本台帳をもとに作成

人口は年々減少傾向にあり、道内他市と比較して減少数が顕著であるとともに、65歳以上の高齢者が占める割合は37%を超え、少子高齢化を反映した人口構成となっている。

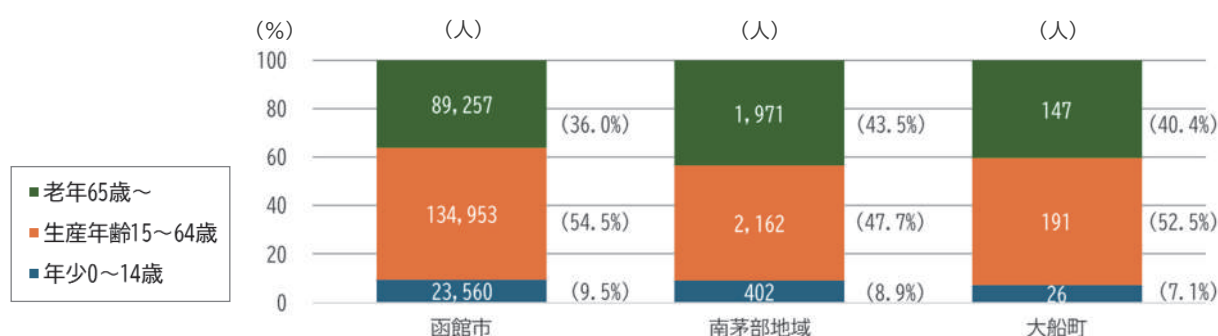


図2-9 函館市・南茅部地域・大船町の人口年齢割合（令和2（2020）年）

国勢調査をもとに作成

## イ 産業・運輸

函館市の主要な産業のうち、第一次産業では沿岸漁業を中心とした水産業が盛んで、令和4(2022)年の漁獲量は、スルメイカ、マグロ、ブリ、キタムラサキウニ、養殖を含むコンブが全道1位、ホッケ、ミズダコなども上位となっている(令和6(2024)年度 函館市農林水産概要)。

特にコンブは国内生産量の9割以上が北海道産だが、函館産はこのうちの約3割を占め、生産量・生産高ともに日本一である。

三方を海に囲まれ、海洋資源が豊富で天然の良港に恵まれている本地域は国内外から多くの人や物が集まり、海運や貿易の拠点として栄え、江戸時代後期の開港を契機に、北洋漁業の基地としての役割が加わって発展してきた。

平成28(2016)年3月には北海道新幹線が開業し、函館市の観光入込客数は560万人を超えたが、新型コロナウイルス感染症の影響を受けて令和2・3(2020・2021)年度には大きく減少、観光産業をはじめ取引がある関連産業が大きな影響を受けた。こうしたなか、令和4(2022)年度からは国内・訪日外国人観光客ともに徐々に回復し、令和5(2023)年には台湾との定期航空路線や海外からのクルーズ客船の寄港も再開するなど、観光客数の回復が期待されている。

陸路では北海道縦貫自動車道(道央自動車道)が、隣接する七飯町の大沼公園インターチェンジまで延伸している。また、函館市桔梗町の函館インターチェンジを起点として、函館市上湯川町の函館空港インターチェンジへ至る高規格道路(函館新外環状道路)が令和3(2021)年3月に開通し、渋滞緩和や道南一円のアクセス向上に寄与している。



写真2-3 大鰯網漁の様子

## ウ 交通アクセス

本史跡は、市内中心部から直線で北東へ約27kmの距離にあり市街地から山間を抜ける道道83号線を通り、南茅部地域の川汲町で国道278号に接続した後、鹿部町方向へ伸びる尾札部道路（バイパス）沿いに位置する。令和5（2023）年3月にはバイパスの部分供用が開始され、史跡の北側まで延伸したため、アクセスが向上した。なお、本地域には鉄道が通っていないため、二次交通の手段はバスを含む自動車による移動となる。史跡までの主要なアクセスは次のとおりである。

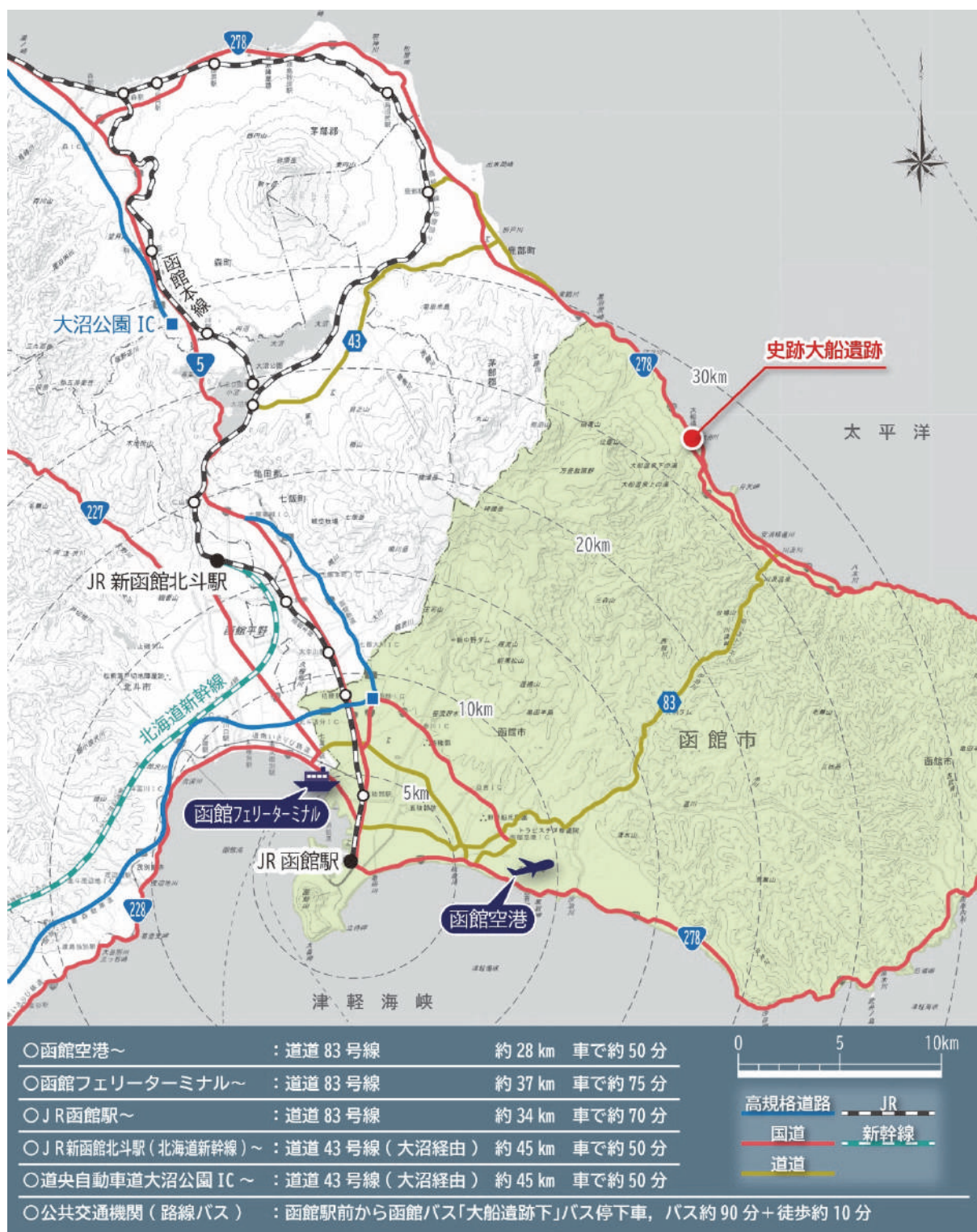


図2-10 主要な交通アクセスポイント（S=1/30万）

地理院地図(国土地理院)をもとに作成

## (4) 歴史的環境

### ア 函館市の歴史

本市は、豊かな水産資源と天然の良港に恵まれていることから、いにしえより海と共に繁栄してきた。中世には道南十二館の一つとして知られる志苔館が築かれ、江戸時代には北前船による交易で賑わった。また、安政6(1859)年には、幕府が長崎、横浜と並び箱館（現在の函館）を日本初の国際貿易港として開港したため、西洋文化の影響をいち早く受け、さらに明治維新の戊辰戦争の際には新政府軍と旧幕府脱走軍との最後の戦い（箱館戦争）の舞台となった。

明治以降は北海道の玄関口として発展し、青函連絡船の運航や函館空港の開港、青函トンネルの開通、北海道新幹線の開業など、津軽海峡を挟んだ本州との交流の拠点としてさらに重要性を増している。

こうした恵まれた自然や地勢によって栄えた本市の歴史は、先史時代にも遡ることができる。現在、函館市域では325か所の埋蔵文化財包蔵地が登録されており、旧石器時代から今日に至るまで人々が連綿と生活を営んでおり、特に本州との交流は様々に変化しながらも繋がってきたことが遺跡や歴史資料から窺える。

### イ 南茅部地域の歴史

#### (ア) 先史時代

南茅部地域においては、水産資源が豊富な太平洋をはじめ、緑豊かな山々や多くの河川など多様な自然環境に恵まれていることから狩猟、漁労、採集を基盤とした縄文文化が栄えていた。縄文時代早期から晩期にわたる90か所以上の縄文遺跡が所在しており、本史跡をはじめ大規模な集落跡が数多く確認されている。

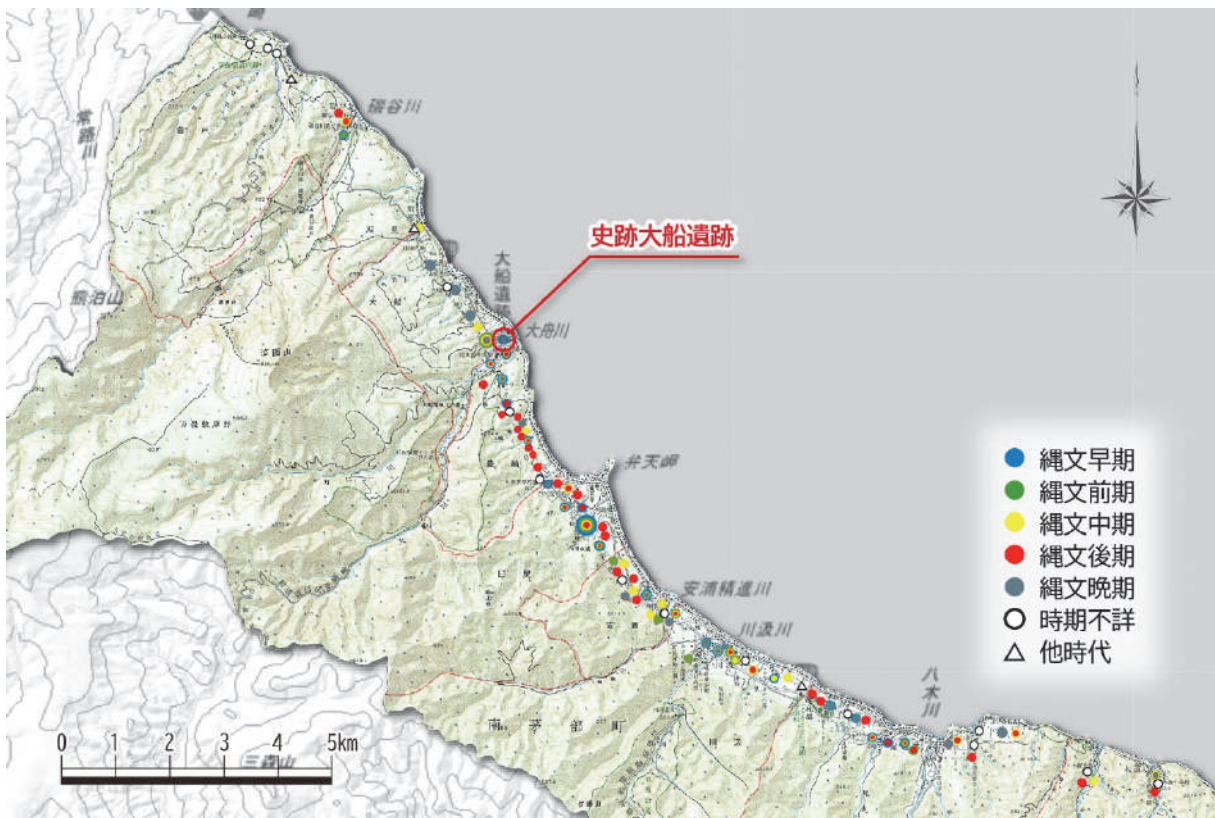
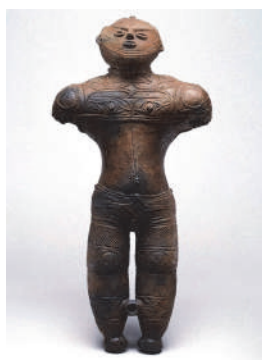


図2-11 南茅部地域の埋蔵文化財包蔵地 (S=1/14万)

地理院地図(国土地理院)をもとに作成

昭和38(1963)年の黒鷲遺跡の発掘調査を嚆矢として、50年以上にわたり実施してきた発掘調査による出土品は400万点を優に超えている。その中には、著保内野遺跡出土の国宝「土偶」(中空土偶)や垣ノ島B遺跡出土の土坑墓(縄文早期前半)に副葬された漆製品、垣ノ島遺跡出土の足形付土版(縄文早期後半)や臼尻B遺跡出土の函館市指定文化財「シカ絵画土器」(縄文中期後半)、本州との交易を示すヒスイやアスファルト塊など、我が国の歴史と文化を語るうえで貴重な考古資料も数多く発見されている。このように限られた範囲ながらも特徴的な地域を形成していることから、本市ではこれらの南茅部地域に集積する遺跡群の活用に向けて、平成18(2006)年3月に「函館市南茅部縄文遺跡群整備構想」を策定している(第1章(4)参照)。



国宝「土偶」  
(著保内野遺跡)



土坑墓に副葬された漆製品  
(垣ノ島B遺跡)



足形付土版  
(垣ノ島遺跡)



シカ絵画土器  
(臼尻B遺跡)



ヒスイ製装飾品  
(垣ノ島遺跡)



注口土器と下部有孔土器  
(八木B遺跡)

写真2-4 主な出土遺物

本史跡周辺には大舟川流域を中心に縄文遺跡が数多く分布している。本史跡に隣接する段丘直下の大舟川河口の平地(低地)には、大船A遺跡が存在する。縄文時代晩期を主体とし、二重の石囲炉が検出されたほか、当該期の土器とともに土偶が出土している。そのほか早期、中期、後期の遺物が少量確認されている。

大舟川左岸の海岸段丘上においては、本史跡の南東側に、前期および中期を主体とする大船H遺跡、中期後半を主体とする大船I遺跡がある。また、本史跡西側の小沢を挟んだ対岸には、中期後葉から後期初頭の竪穴建物跡や土坑、早期、中期から晩期、続縄文時代の遺物が確認された大船G遺跡が存在する。



図2-12 史跡周辺の埋蔵文化財包蔵地  
(S=1/4万)  
地理院地図(国土地理院)をもとに作成

一方、大舟川右岸においては、縄文早期から晩期の遺物が確認された豊崎M遺跡が所在し、主体となる中期には本史跡と同時期の小規模な住居群が形成されている。そのほか河岸段丘上の標高60～80mの緩斜面には豊崎N遺跡、標高30～32mの緩斜面には豊崎Q遺跡が所在する。いずれも縄文早期や後期を主体とし、豊崎N遺跡からは後期中葉の土器に入ったアスファルト塊が出土している。

このように、縄文時代の大舟川流域は、時期ごとに異なる立地環境を生活の場としていたことが窺えるが、縄文中期には本史跡が地域の拠点的な集落であったと位置付けられる。

なお、前出の大船A遺跡を除くと、縄文晩期を主体とする遺跡は確認されておらず、遺物が散見される程度である。後続の続縄文文化期においても遺構はほぼ検出されず、遺物の出土も少ない。さらに擦文文化期になるとその傾向はより顕著となり、縄文晩期以降において当該地域の利用は極めて少ない状況にある。



大船G遺跡，大船H遺跡



豊崎Q遺跡



アスファルト塊（豊崎N遺跡出土）

写真2-5 史跡周辺の遺跡

## (イ) 歴史時代

史料にみえる南茅部地域の歴史は、延宝5(1677)年、能登の飯田屋与五右衛門が八木浜（現尾札部町）へ漁業のために来住したことに始まるとされる。近世には商場知行制に基づく松前藩の箱館六箇場所（持場）中で最大の場所である尾札部場所に含まれる。尾札部場所は南茅部地域の中央東寄りを流れる八木川と尾札部川の間を拠点に、東は亀田半島東端、西は松屋崎（現森町砂原地域）で、約62kmの海岸線に設定されていた。近世には松前藩主直轄領、松前藩の重臣新井田家の知行地や幕府直轄地などになっており、また和人とアイヌの人々との交易場所である運上屋が尾札部と白尻にあった。産物はコンブ、ノリ、ニシン、イリコ、干鰯、魚油、オットセイなどで、恵山岬から木直までの約12kmの険しい断崖の続く前沖はブリ、マグロ、タラの有数の漁場で、尾札部川から西方の鹿部川下での磯浜は良質なコンブの産地であった。特に当地域の昆布は北前船の時代から白口浜真昆布と呼ばれ「天下昆布」、「昆布の絶品」（『蝦夷嶋奇観』）とされ、江戸時代には将軍家への献上品とされた。



図2-13 蝦夷嶋奇観

寛政12(1800)年、和人の集落化が進んだことから、幕府は臼尻を含む箱館六箇場所を和人地と定め村並とした。安政5(1858)年に臼尻は正式に村となり、現在の南茅部地域の西半部にあたる板木・熊泊・磯谷を持場として含んだ。

文政期(1818～1830年)に南部三陸地方で発達したニシン建網(大謀網)が天保10(1839)年に臼尻・尾札部に伝わったことから、当地域は北海道大謀網(定置網)漁業発祥の地となった。尾札部町黒鷲岬にはこれを記念する石碑が建立され市指定史跡となっている。

明治2(1869)年の国郡面定では渡島国茅部郡に所属、明治6(1873)年に臼尻村から熊泊村が独立し、明治39(1906)年に臼尻村は熊泊村と合併し臼尻村として尾札部村とともに二級町村制を施行した。なお、明治9(1876)年に尾札部村から楳法華村を分村している。

昭和34(1959)年5月に臼尻村・尾札部村の両村が合併し、南茅部村を経て、同年9月に町制を施行し南茅部町となった。平成16(2004)年12月1日には戸井町・恵山町・楳法華村とともに函館市と合併した。

なお、江戸時代以降かつての大船地区の地名には、「クマオ」「クマトリ」「大舟川」「二艘トマリ」「大船川」「ヲタハマ」「クマトマリ」「熊泊り」などの表記がみられる。明治16(1883)年以降には大字熊泊村「字稻荷野」「字小田浜」「字太田浜」など多くの小字名が記されていたが、昭和16(1941)年の旧臼尻村字名改正において「字大船」となり、平成16(2004)年の合併後は「大船町」となった。



写真2-6 北海道建網大謀網漁業発祥の地及び記念碑

## (5) 文化財

本市には、令和7(2025)年3月現在、国指定文化財18件、国選定文化財1件、国登録文化財21件、北海道指定文化財19件、函館市指定文化財90件、計149件の文化財がある。

国・道指定の文化財は建造物や古文書など幕末から明治期にかけてのものが多く、函館の歴史的特徴がよくあらわれている。加えて、北海道を特徴付けるアイヌ文化に関する資料も見られる。

このうち国の特別史跡に指定されているのは五稜郭跡の1件、史跡に指定されているのは、本史跡を含め四稜郭、志苔館跡、垣ノ島遺跡の4件である。また、先史時代(旧石器時代、縄文時代、続縄文時代)に属する文化財(史跡および考古資料)は、道指定史跡の恵山貝塚など19件である。

表2-1 函館市の文化財一覧

| 区 分           |         | 国  |    | 道  | 市  | 計  |
|---------------|---------|----|----|----|----|----|
|               |         | 指定 | 選定 | 登録 | 指定 |    |
| 国宝            |         | 1  |    |    |    | 1  |
| 重要文化財         | 建造物     | 6  |    |    |    | 6  |
|               | 美術工芸品   | 3  |    |    |    | 3  |
| 特別史跡          |         | 1  |    |    |    | 1  |
| 史跡            |         | 4  |    |    | 3  | 4  |
| 名勝            |         | 1  |    |    | 3  | 4  |
| 天然記念物         |         |    |    |    | 5  | 5  |
| 重要有形民俗文化財     |         | 1  |    |    |    | 1  |
| 重要無形民俗文化財     |         | 1  |    |    |    | 1  |
| 登録有形文化財       |         |    |    | 20 |    | 20 |
| 登録記念物         |         |    |    | 1  |    | 1  |
| 有形文化財         | 建造物     |    |    |    | 5  | 1  |
|               | 美術工芸品等  |    |    |    | 11 | 70 |
| 重要伝統的建造物群保存地区 |         |    | 1  |    |    | 1  |
| 民俗文化財         | 有形民俗文化財 |    |    |    | 5  | 5  |
|               | 無形民俗文化財 |    |    |    | 2  | 2  |
| 計             |         | 18 | 1  | 21 | 19 | 90 |

表2-2 先史時代に属する文化財一覧

## &lt;国指定&gt;

| No. | 区分    | 名称            | 時代 | 所在地                       | 指定年月日     |
|-----|-------|---------------|----|---------------------------|-----------|
| 1   | 国宝    | 土偶            | 縄文 | 函館市白尻町551-1<br>縄文文化交流センター | 2007/6/8  |
| 2   | 重要文化財 | 北海道豊原4遺跡土坑出土品 |    | 函館市白尻町551-1<br>縄文文化交流センター | 2016/8/17 |
| 3   | 史跡    | 大船遺跡          |    | 函館市大船町                    | 2001/8/13 |
| 4   |       | 垣ノ島遺跡         |    | 函館市白尻町                    | 2011/2/7  |

## &lt;道指定&gt;

| No. | 区分    | 名称           | 時代  | 所在地                | 指定年月日      |
|-----|-------|--------------|-----|--------------------|------------|
| 1   | 有形文化財 | 樽岸出土の石器      | 旧石器 | 函館市青柳町17-1 市立函館博物館 | 1957/12/20 |
| 2   |       | 榎法華出土の尖底土器   | 縄文  | 函館市青柳町17-1 市立函館博物館 | 1968/3/29  |
| 3   |       | 日ノ浜遺跡出土の動物土偶 |     | 函館市青柳町17-1 市立函館博物館 | 1970/2/12  |
| 4   |       | サイベ沢遺跡出土の遺物  |     | 函館市青柳町17-1 市立函館博物館 | 1971/3/5   |
| 5   |       | 住吉町遺跡出土の遺物   |     | 函館市青柳町17-1 市立函館博物館 | 1971/3/5   |
| 6   | 史跡    | 恵山貝塚         | 続縄文 | 函館市柏野町             | 1967/3/17  |

## &lt;市指定&gt;

| No. | 区分    | 名称                                                                           | 時代  | 所在地                       | 指定年月日      |
|-----|-------|------------------------------------------------------------------------------|-----|---------------------------|------------|
| 1   | 有形文化財 | 恵山貝塚出土品を中心とする恵山文化期骨角器製品一括資料506点並びに恵山貝塚出土遺物を中心とする恵山式土器一括資料62点(いずれも旧能登川コレクション) | 続縄文 | 函館市青柳町17-1 市立函館博物館        | 1962/11/3  |
| 2   |       | 日ノ浜遺跡出土硬玉製玉(縄文晩期)                                                            | 縄文  | 函館市青柳町17-1 市立函館博物館        | 1962/11/3  |
| 3   |       | 有舌尖頭器類73点                                                                    | 旧石器 | 函館市青柳町17-1 市立函館博物館        | 1964/11/3  |
| 4   |       | 白尻B遺跡出土『シカ絵画土器』                                                              | 縄文  | 函館市白尻町551-1<br>縄文文化交流センター | 2000/8/10  |
| 5   |       | 八木B遺跡出土『注口土器及び下部有孔土器』                                                        |     | 函館市白尻町551-1<br>縄文文化交流センター | 2000/8/10  |
| 6   |       | ブラキストンの大形磨製石斧                                                                |     | 函館市青柳町17-1 市立函館博物館        | 2006/4/12  |
| 7   |       | 白尻C遺跡出土の赤彩土器                                                                 |     | 函館市白尻町551-1<br>縄文文化交流センター | 2017/5/10  |
| 8   |       | 戸井貝塚出土品                                                                      |     | 函館市青柳町17-1 市立函館博物館        | 2019/12/25 |
| 9   | 史跡    | 日ノ浜遺跡                                                                        |     | 函館市高岱町                    | 1959/8/1   |

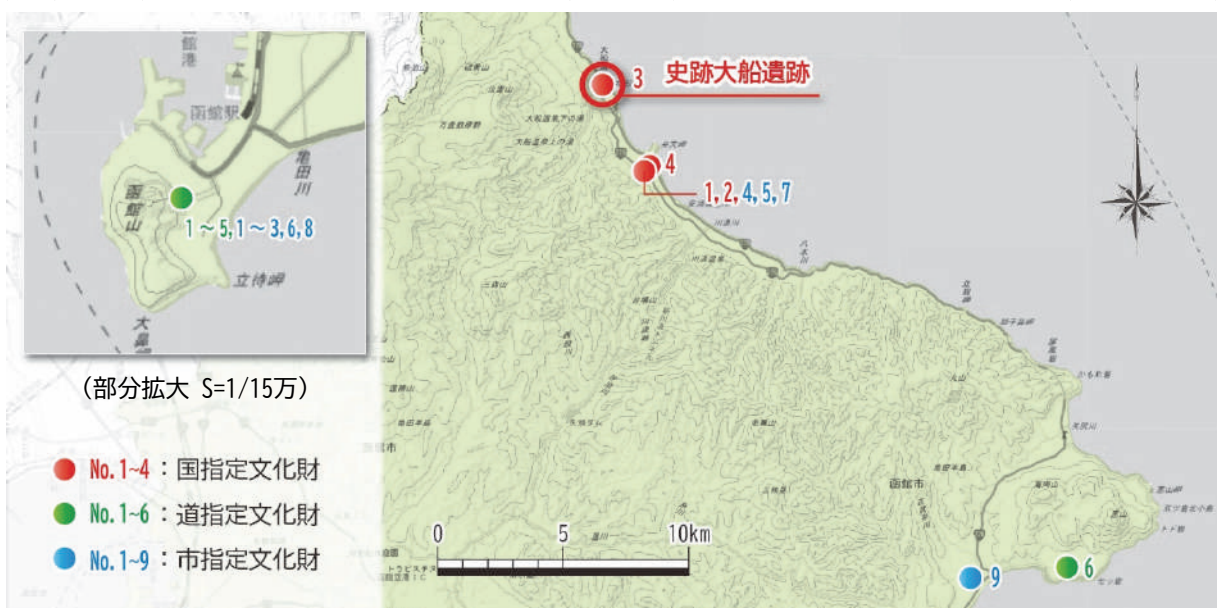


図2-14 先史時代に属する文化財位置図 (S=1/30万)

地理院地図(国土地理院)をもとに作成

文化財に指定されている考古資料は、いずれも市立函館博物館または縄文文化交流センターで所蔵しており、学芸員資格を持つ専門職員のもとで保存・管理している。また、史跡についても現況調査のほか状況確認を都度行うなどして、適正な保存管理に努めている。



垣ノ島遺跡



北海道豊原4遺跡土坑出土品



楢法華出土の尖底土器

写真2-7 先史時代に属する文化財

## (6) 観光

国内屈指の観光都市として人気が高い本市は、観光業が基幹産業の一つとなっている。令和5(2023)年の観光入込客数は約528万人で、コロナ禍における一時期の減少傾向から増加傾向に転じている。夜景で人気の高い函館山の眺望など良好な景観や温泉施設などに恵まれ、伝統的建造物群や特別史跡五稜郭跡など歴史的な建造物や史跡が数多く存在し、新鮮な魚介類など食の魅力も来訪の目的となっている。近年は北海道新幹線の開業による道外からの観光客や、国内外からのクルーズ船の寄港による観光客が増加している。また、アジア各地を中心に海外からの観光客数が年々伸びており、滞在型、通年観光型の国際観光都市を目指している。

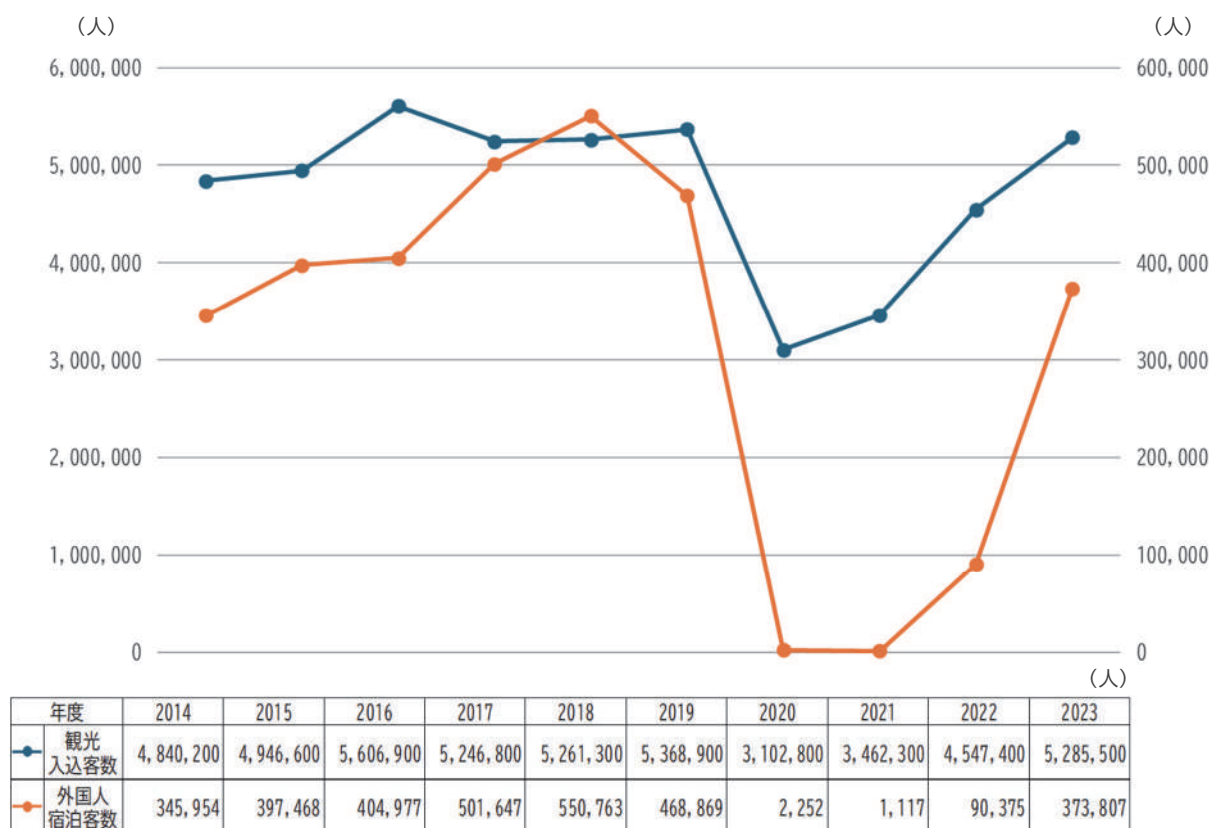


図2-15 観光入込客数・外国人宿泊客数（令和5(2023)年）

函館市ホームページ「来函観光入込客数推計」をもとに作成

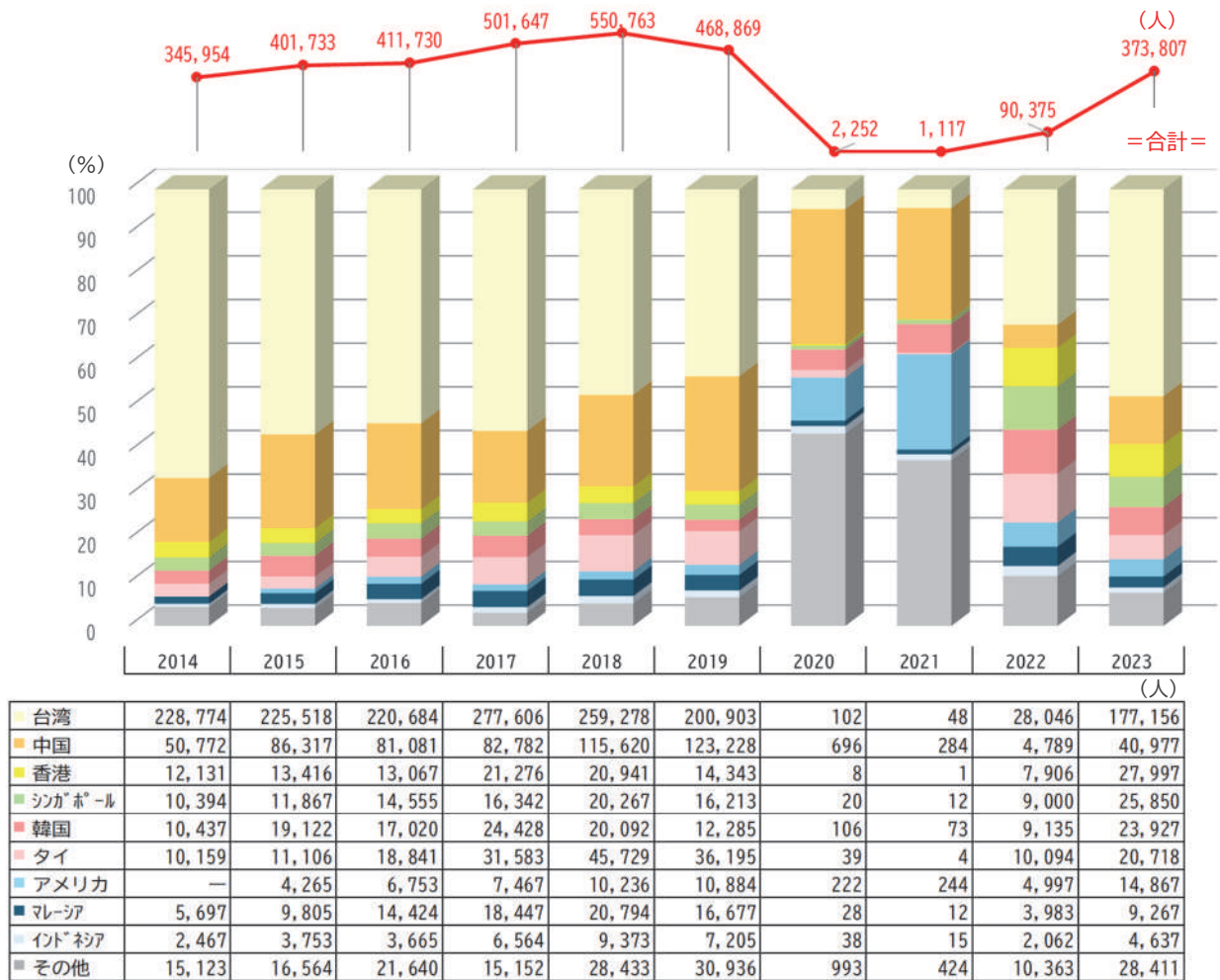


図2-16 国別外国人宿泊客数（令和5（2023）年）

函館市ホームページ「来函観光入込客数推計」をもとに作成



図2-17 主な観光・レクリエーションスポット

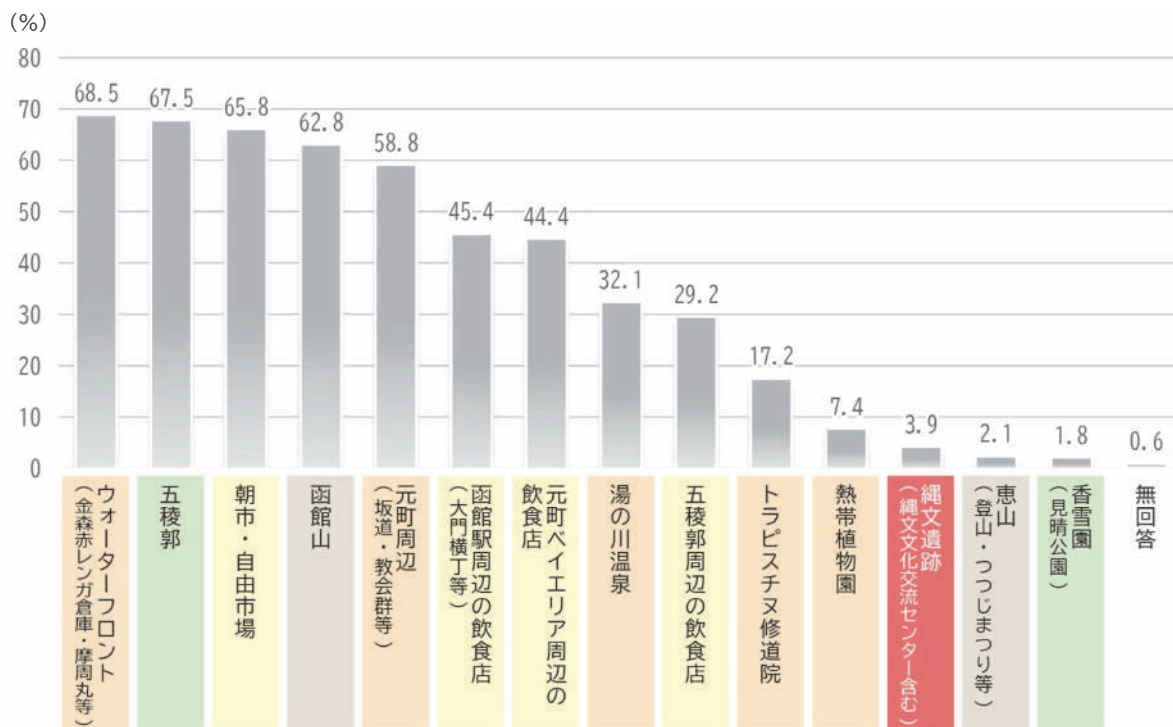


図2-18 国内旅行者の訪問率（令和4（2022）年）

函館市ホームページ「令和4年度(2022年度)函館市観光動向調査」をもとに作成



函館山からの眺望



特別史跡 五稜郭跡



朝市



旧函館区公会堂



金森赤レンガ倉庫



ハリストス正教会

写真2-8 主な観光スポット